

絵葉書に見るヴァイマル共和国時代の首都ベルリン ドイツ帝国時代の建築物

終身会員 ○ 田 中 辰 明*

ベルリン	ドイツ帝国	ヴァイマル共和国
第二次世界大戦	絵葉書	昭和初期

はじめに

筆者の知人の祖父が昭和の初期に欧州に公用出張した。ベルリンも訪問し、ベルリン、ポツダムの絵葉書を購入し帰国した。その絵葉書は知人に引き継がれ無事に保存されていた。絵葉書の購入時期は不明であるが、昭和2年(1927年)と想像される。それはヴァイマル共和国時代である。この絵葉書にある多くの建物はヴァイマル共和国時代よりさらに前のドイツ帝国時代に建設されたものである。絵葉書を示し、現在はどのようなになっているか、解説を行う。

1. ドイツ帝国議会



当時帝国議会建物の前にはビスマルクの銅像が建っている。この像は1938年から1939年にかけて、ティアガルテン地区のグローサーシュテルンに移設された。台座にある他の像は行方不明となった。帝国議会はPaul Wallotの設計で1884-1894年に建設されたが、第二次世界大戦で大きく破壊され、後に修復され、現在はドイツ連邦共和国の連邦議会議事堂として使用されている。

2. ベルリン王宮

1701年からはプロイセン王国国王の、1871年からはドイツ帝国皇帝の王宮であった。1918年のドイツ革命でWilhelm II世がオランダに亡命以来王宮は博物館として使用された。1945年に英米軍の空爆により破壊された。1950年にドイツ民主共和国(東ドイツ)政府により、取り壊された。ドイツ再統一以降2013年から再建工事が始まり、2020年12月に複合文化施設として開館した。

王宮の前にある銅像はGroßer Kurfürst(大選帝侯)、フリードリッヒ・ヴィルヘルムである。現在はこの銅像はシャロットテンブルグ王宮に移築されている。ベルリン王宮改修と共に元の位置に戻すべきという議論もある。



3. 大学



この絵葉書は単に大学(Universität)と記されている。後のフンボルト大学である。学術的に最高峰の大学で、日本からも森鷗外はじめ著名人が留学した。Heinrich 皇太子の死後(1802年)に皇太子の王宮が大学建物として使用された。当時から2階建バスが走行していた。

4. 戦勝記念塔

戦勝記念塔はプロイセンがデンマークに勝利したのを記念し1864年に帝国議会の正面に建設された。Friedrich Draleの作品である。後にオーストリア(1866年)、フラン

ス（1870-71 年）に勝利し、その記念も含まれた。高さは60.5mであった。ヒットラーが政権を取ると、これをティアガルテン地区のグロサーシュテルンに移動し、高さも67mに伸長された。



5. ウンター・デン・リンデンの武器庫



この建物はウンター・デン・リンデン（Unter den Linden）にあったプロイセン王国、ドイツ帝国の武器庫であった。第二次世界大戦で破壊されたが、修復され、現在はドイツの歴史博物館になっている。屋上の彫刻物は全て撤去された。

6. ウンター・デン・リンデンとフリードリッヒ通りの交差点



ベルリンで最も賑わった大通りであるウンター・デン・リンデンとプロイセンを大国に導いたフリードリッヒ大王を記念して名づけられたフリードリッヒ通りとの交差点である。ベルリンで最も賑わった場所である。地下鉄（U-Bahn）と高架鉄道（S-Bahn）の駅がある。東西ドイツに分かれていた時代にはここに国境を超えるチェックポイントチャーリー（国境検問所）があった。いつも国境を超える人の長い列があった。

7. 博物館と遊歩庭園



ギリシャ古典式建築をベルリンに多数残した Karl Friedrich Schinkel の作品で1822/23 と1825/30年に建設された。前面の18本のイオニア式列柱が特徴的である。シンケルはギリシャの古典式建築を多数残しているが、他の建築家もギリシャ古典式建築をベルリンに残している。歴代のプロイセンの国王がギリシャ古典式建築を好み建築家に建設を命じたと考えるのが妥当であろう。

・謝辞

この報告を纏めるに当たり、絵葉書の提供をされた知人、適切なアドバイスを下さった旧ベルリンのパウハウス文書館学芸員であった Magdalena Droste 女史、ベルリン出身の駐日ドイツ大使館 Beate von der Osten 女史に謝意を表する。

おわりに

ベルリンの町はドイツ帝国の時代にビスマルクの知遇を得た James Hobrecht(1825-1902)により立派な都市計画が行われていたことに改めて敬意を表する。

参考文献

1. Architekturführer „Berlin“ Dietrich Reimer Verlag Berlin
2. Die Chronik Berlins, Chronik Verlag 1991
3. Friedemann Bedürftig „Preußisches Lesebuch“ Unipart Verlag Stuttgart
4. Antonia meiners „Das Alte Berlin“ Nicolai
5. Michael Bienert-Elke Linda Buchholz „Kaiserzeit Verlag